平成25年度教師海外研修（ラオス）研修報告書

学 校 名	名古屋市立小幡小学校	氏　　名	籠谷　美紀

1．印象に残る写真２点

●「織機のそばで遊ぶ男の子」

織物の村（サンコン村）で見かけた男の子。家族と思われる人が織物を作る横で、織物の道具などで遊んでいた。家族は一緒にいるのが当たり前、大切なものは家族と答えるラオス人らしさが感じられた。

●「ほしいものは知識」

子ども文化センターで出会った子どもたち。日本の紙飛行機や折り紙、けん玉などに興味津々。知ること、学ぶことが楽しいという思いは共通していることを実感した。ほしいものは知識という子どもたちも大勢いた。

2．現地研修に対する各自の目的 とその達成度
（特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて）

私は子どもたちに様々な国のあり方を肯定的に受けとめられるようになってほしいと願っている。そして世界は多様性にあふれていること、中にはあってはならない違い（貧困等の課題）があることを知り、同じ地球上で生きる者として自分には何ができるのかを考え、行動できるようになってほしいと思っている。

これまでにも実践は行ってきたが、知識だけではなく私自身が世界の文化に実際に触れ、実感のこもった言葉で子どもたちに語れるようになりたいと思い、この研修に参加した。

実際に現地（ラオス）に行ったことで、ラオスの素晴らしさを多く知ることができた。中には日本と共通することや繋がりを感じるものも少なくないことに気付くことができた。またプログラムの中に病院やごみ処分

場、障害者活動の支援などの様々な場所や、青年海外協力隊や JICA 専門家、草の根技術協力など様々な関わりの訪問先を計画していただいたことで、「課題をともに越える」ためになされている取り組みも詳しく学ぶことができた。とても充実した研修となり、今後子どもたちに伝え、ともに考えていくことがとても楽しみである。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

現地研修初日、JICA ラオス事務所で「知らないと怖いと感じることがある」という例え話をされた。渡航経験もほとんどない私は今回のラオス訪問に対しても多少不安に感じていたため、この話が印象的だった。

しかし、すぐにこの心配は不要であったと知ることになった。どこに行っても「サバイディー」とにこやかにあいさつの言葉をかけてくれる。どこに行っても何を聞いても「いいよ」「どうぞ」と答えてくれる人の温かさが素敵だなぁと思った。ナイトマーケットでは商品を選んでいると小さな腰掛を貸してくれることまであった。またおつりが足りないと、隣近所のお店でお金を貸しあうのも当たり前の様子。助け合うのが当たり前だと考えていることが感じられ、とても穏やかで「コプチャイ（ありがとう）」と言いたくなることが何度もあった。違いを意識して構えていたのは自分の方だと、恥ずかしくも思った。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

どの訪問先でお会いした青年海外協力隊や JICA 専門家の方も、笑顔でとても自然体であったことがとても印象的であった。「どうしてわざわざラオスで働いているのか、働こうと思ったのか」という私の疑問は馬鹿らしく思えるほど、日本とラオスの境界線を感じていないように思えた。実際には言葉や文化の違いに苦悩することも多く、思うように言葉で伝えられなかったり、考えが受け入れられなかったり、挫折しそうになることもあったとどの青年海外協力隊の方も話してみえた。しかしどこで働いていたとしても、目の前にいる人たちとともに自分にできることを精一杯やることに違いはないのだと感じることができた。

もう一つ共通点を感じたのは、子ども文化センターに行ったときの子どもたちの姿。私たちが紹介した日本のものにとても興味をもってくれた。私は折り紙を紹介したが、見本の折り紙を広げて研究し、自力で作ろうとする姿にとても感心した。どこに行ってもやはり子どもは学ぶこと・成長することはうれしいのだなぁと感じた。同時にこの子どもたちにしっかりと学ぶ機会を保障してあげたいと思った。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

日本でも共通していると思った課題、その一つがごみ問題。ラオスでは都市化が進む中でプラスチックごみが増え、ごみ処理が大きな問題になっているということだった。また国の力が弱く、日本のように税金によるごみ処理を行うこともできないという状況にある。そこで買い物時にビニール袋を使わないようにエコバスケットを配布したり、出たごみもコンポストによって自家処理を推進したりする取り組みを行っていた。しかもその説明会に地域住民全世帯が出席し、熱心に話に耳を傾けていた。住民一人一人が自分たちのやるべきこととしてとらえているように思えた。私は、「ラオスのために日本ができることは何か」と無意識のうちに考えていたが、自分事として地域や環境について考え行動する姿勢には頭が下がる思いがした。私たちがラオスから

学ぶことも多くあることに改めて気付いた。

4. JICAの国際協力事業 の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

これまで JICA の行っている事業といえば橋の建設や道路の整備などの印象が強かった。しかし、今回訪問させていただき想像以上の細やかな取り組みがなされていることに驚いた。特にラオスパイロットプログラム環境コンポーネント事業について学ばせていただいたとき、ハード面とソフト面の両面からの取り組みがなされていることがよくわかった。日本のやり方を押し付けるのではなく、ラオスの生活を理解した上でのシステム作りやシステムの周知徹底（例えば村長への依頼、村長から住民一人一人への説明、住民の行動へなど）が順を追って丁寧に取り組まれていることがわかった。プロジェクト自体、まだスタートしたばかりで、成果は数値化してはかることはできないが、実際にエコバスケットやミミズのコンポストなどを受け取った人々の真剣な表情や話をする様子から、地域の人々に受け入れられていると感じられ、それが何より素晴らしいなぁと感じた。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

・持ち物…とにかく軽量化することをお勧めします。ホテルは日本のようにアメニティはそろっていませんが、タオルはどのホテルでもありました。

・両替　…両替できるところはたくさんありましたが、両替に行っても「今お金がないから後で」といわれることがありました。その時は数十分後には両替できたのですが、スケジュール上そんなに待っていられないこともあると思います。早めに同行者の方にいつ両替できそうか相談しておくといいと思います。

・言葉　…今回、私たちの研修にはラオ語と日本語が話せる方が、通訳さんとガイドさんの 2 名いました。それでもやはり自分でコミュニケーションをとりたい場面はたくさんあります。簡単な言葉なカンニングペパーを使いながらでも、話せるようにしておくといいと思います。（ただし、あまり頑張ってラオ語で話すと相手からもラオ語で話されてしまい困ることもありました。）

・仲間　…研修中、疲れてきたり体調がすぐれなかったりと、少しつらい時もあるかもしれませんが、そんなときにも支えてくれるのは仲間です。10 日間ともに学んだ仲間は一生の仲間になります。ぜひオープンマインドで！

6. その他全般を通じての感想・意見など

本当に参加できてよかった。その一言に尽きます。ラオスのことを学ぶことができたのはもちろん、自分や日本を振り返るきっかけにもなりました。学んだことがあまりにも多いため、何をどのように子どもたちに伝えていこうか、これから新たな課題がありますが、未来をつくる子どもたちに少しでも多くのことが伝えられるように学校現場で実践していきたいと思います。

このような経験ができたのは JICA や NIED・国際理解教育センターの方々、そして最高の仲間のおかげだと思います。本当にありがとうございました。この有意義な研修をぜひこれから先もずっと続けていただき、多くの教員の方々に参加してもらいたいと思います。

以上